

耕縁白豊

NO.68 西畑亮一 先月、「国家無答責」につながる話として警察官のことを書きましたが、殉職してまで職責を全うされる人もおられますが、市民や法令等々を守って当たり前ですから、そうでないと社会的影響は大きく世間じゃとても目立ちます。彼ら

は、組織の一員として、OJT(On the Job Training:職場内訓練)という現場で仕事をしながら上司の行為をそのまま真似る形の訓練によって、教えられたとおり忠実に機械的に作業しているそうです。ある意味組織の一部となることが要求されるのでしょう。しかし個々に、凶器(人の自由を奪い殺人も可能な銃器)を携帯している実力行使可能な権力的公務員としての自覚がなければ、反社会的暴力集団と紙一重の組織ともなりうるのです。

装備の破壊力という点で、警察組織の上を行く組織が日本にあります。11月18日の参議院予算委員会で、仙谷由人官房長官の「暴力装置」や「軍事組織」発言で話題となった自衛隊です。折角、多くの予算が投入されている自衛隊について議論する機会が生まれたにもかかわらず言い出した本人がすぐに「実力組織」と訂正されたので、私は残念に思いました。政権与党の官房長官という職業的立場がもたらす特権も含め、善行を行うも悪行を行うも私たち国会議員次第であって、国民の代わりに選ばれし各議員の行動がその都度すべての側面で問われているとし、この特権によって国民の人権が侵害される場合には「暴力装置」との側面が自らにもあると明確に言えば、より妥当な発言となったのではないのでしょうか。自分のことは善行側において、自衛隊を「暴力装置」扱いしたり、あのように「暴力装置」発言を批判したりするのは同じことだと思います。このことをわかりやすくかつ本質を突いて藤元正樹さんが説いてくれているのが、11月の寺報の「いわんや悪人をや」です。もちろん私も、「邪見矯慢」によって思い込みを意識することができました。妥当性を欠いた身体に対する有形力の行使(実力行使)あるいは物理的強制力、これを暴力とすれば暴力は至る所にあり、けって他人事ではないのです。多くの人びとが使えぬ個人の身体的暴力と同時に、それらを内包した集団の有形無形の暴力をも問題にしなければなりません

この予算委員会で、進行役の委員長に名前を「仙谷内閣総理大臣」と呼び間違えられた菅さんですが、相対した場合、相手の名の呼び方は肝心ですよ。向き合う他者をどう捉え呼びかけるかは自己にとって大切な課題です。そこで、自己の名を明示することについて非権力的な、例えば役所の住民課の職員で名札を付けて目の前の公務担当者がどこの誰であるかを市民に明らかにしている場合があります。そうであるならば、物理的強制力を行使できる人間の場合にはなおのこと、余程の緊急事態でもない限り氏名と立場を明らかにする必要があると思うのですが、いかがでしょうか。それは、自衛隊員よりもより身近な警察官に要求されるでしょうね。四日市の誤認逮捕による違法制圧死亡事件でも、馬乗りになった警察官は三重県警のいったい誰なのかまったく不明です。少なくとも主権者に対し個人情報に要求する程度に、いつでもどこでも公務中はどこの誰であるのか一目瞭然にしてみたいものです。それとも、私たちに対してそうはしたくない特別な秘すべき理由でもあるのでしょうか。例えば、捜査上の必要と言い張り個人責任を曖昧にする警察官の匿名性というものは、不当にも正当だと強弁すればするほど公権力による暴力の温床に変わるです。この匿名性は、2009年7月の寺報の「閉目開目」で、玉光順正さんご指摘の「秘密主義」であり、「国防上の秘密に大義名分を与えてしまっている私たち自身」は、職権乱用だけでなく、暴行、強制猥褻、盗撮、誤認逮捕等々のあるまじき行為を繰り返し、やたらと犯罪者を多数出し懲戒処分が増えている警察官に、こともあろうに防犯上の名目を与えているのです。

そして、数が増えていると言え、これまた相変わらずの悲しい水準を保っている自殺者数です。11月27日、JR姫路駅南側の姫路市北条にある姫路少年刑務所姫路拘置支所で、収容中の60代の男性が自殺したとの辛いニュースに接しました。被収容者の自殺を調べると、今年1月から未遂も含め、この姫路の件を入れて14件見つかりました。私がサッと調べただけで、刑務所や拘置所等の同じ系列の施設で月に1人以上です。一応ニュースにはなっていますが、マスコミもあまり大きく取り上げていないようで、私自身これまでは無関心でした。これがもし、各地の公立病院や学校で起こっていたなら、日本中を揺るがす大問題となっていることでしょう。なぜ、こうも冷ややかな扱いになっているのでしょうか。収容施設は、ほとんどが困った末に最悪な選択をした人たちを収容しています。そこでは、次の新たな選択肢のためにどう被収容者を助けられるかの意識なく、共生すべき人間社会で選択自体が難しくなるよう囲い込んで強制しているかのように思えます。強制から共生が生まれるのでしょうか。自らの意図なく生まれた人間が意図して死を選べると言うのでしょうか。だから、そのような選択肢にまで意図せず追い込まれた人が多いのです。日本の広義の「死刑制度」には2つの面があり、これは収容施設で行われる「いのちを蝕む」裏であって、表は刑場で行われる「いのちを奪う」面です。難儀なことは、社会のあらゆる場面で巧妙に「生かさず殺さず」なこの両面が使い分けられ、私たちがその対象物化していると同時に、そのような便利使いできる装置の使い手が他ならぬ私たち自身であるという点なのです。